

Aサイズ殺人事件

阿刀田 高



文春文庫



文春文庫

278—2

Aサイズ殺人事件

定価はカバーに
表示してあります

1982年9月25日 第1刷

1988年3月1日 第11刷

著 者 阿 刀 田 高

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-727802-2

文 春 文 庫

A サイズ殺人事件

阿 刀 田 高



文 藝 春 秋

連作推理 Aサイズ殺人事件 目次

第一話	Aサイズ殺人事件	7
第二話	2DK蟻地獄つき	35
第三話	靴と媚薬と三人の女	70
第四話	二重人格の死	103
第五話	裸足で天国へ	138
第六話	古物の好きな死体	174
第七話	葉桜の迷路	208
第八話	ハーフ・ムーン殺人事件	236
解説	新保博久	273

連作推理 Aサイズ殺人事件

第一話 Aサイズ殺人事件

御影石の古びた門柱には「世外勝境」の四字が彫ってある。敷地のすぐ隣まで近代的なビルが迫っているのだから「世外勝境」はちよっと言い過ぎのような気もするが、それが禅家のならわしなのかもしれない。それともこの門を建てた頃にはこの界限も今よりずっと浮世離れしていたのだろうか。

石門をぬけると正面に本堂があり、右手の木戸の奥に住職の家族が住む母屋があった。

「ごめんください」

「はい」

坊主刈りにトックリ・セーターの修行僧が現われ丁寧にお辞儀をした。

「どうぞ、お二階へ」

訪問することは前もって電話で伝えておいたので、二階の客間はパネル・ヒーターで柔かくぬ

くもっていた。座敷のまん中にはもう碁盤までそろえてある。

佐村英介は大きな座布団に腰をおろし、修行僧が運んで来たお茶を口に含んだ。

妙法寺の和尚と知りあったのは、殉職した友人の墓がここにあるから。たびたび墓参をするうちに顔見知りになり、ある日碁を打ったのがそもそのなれそめである。佐村は三十そこそこ、和尚は五十を三つ四つ越えているだろう。年齢の差は大きいが妙に気分の合うところがあった。碁の腕前は……そう佐村は自分のほうが少しうまいと信じているが、和尚のほうには、またべつな判断があるにちがいない。

住職がどういう経歴の人間か、佐村もあまりくわしくは知らない。ただ妙法寺は和尚の生家ではなく、入り婿である。これだけの寺院の住職にすわっているのだから、いずれしかるべき仏教大学の専門コースに学び、一定の修行は積んでいるのだろうが、初めから僧職を志した人間かどうかはあやしいものだ。若い頃には結構やりたい放題の生活をしていたものが、途中からなにかの事情で「坊さん」になることとなり、今はその立場上神妙な顔をして仏の道を説いている——そんな気がしないでもない。

「やあ、どうも、お待たせしました」

住職も黒いトックリのセーター姿で現われた。和尚というより下町の職人みたいな様子である。「寒くないですか。夕ごはんは……そう、すんだの。じゃあ、酒を少し飲みましょうかね」

この坊さんは酒、刺身はもちろんのこと町のキャバレーの噂までよく精通している。「どうもご無沙汰ばかりで……」

「いそがしいですかね」

「ええ、まあ……」

「あんたがたは、ひまにしているほうが世間のためじゃがなあ」

そう言いながらも和尚は碁盤の覆いを取り、碁笥ごけを引き寄せた。

殺人担当の刑事と坊さんの取り合わせ、これは考えようによっては案外近しい商売なのかもしれない。刑事も坊さんも死体ほとけがなければ商売が始まらない。

「丁先」

和尚が握り、数えてみると石の数は十三。佐村が白を取った。

修行僧が酒と肴さかなをお盆に載せ、それぞれの脇に置いた。

「では、ご馳走になります」

「どうぞ、どうぞ」

佐村が妙法寺に来るのは、碁を打つのが目的ではない。いや、たしかに住職を相手に静かな部屋で碁を打ちながら美酒をご馳走になるのは、それだけで充分に訪問の目的となりうるものだ。できることならば、一度くらいはそれだけの目的で妙法寺の門をくぐってみたいと思う。

しかし捜査第一課の刑事はそれほどノンビリした稼業ではない。

「ホテルの貯水槽から若い女の死体が出ましてね」

勝負が中盤にさしかかったところで佐村はポツリと本日の用件をほのめかした。

「連れ込みホテルかな」

和尚は盤面の切りちがえを睨みながら独り言のように言う。

いったい和尚の脳味噌はどういう構造になっているのか。死んだらぜひとも解剖医に剖検させてみたいものだ。二つのことを一度に考えていて、いっこうに戸惑う様子がない。

「いや、エメラルド・ホテル。超一流ではないけれど、れっきとしたホテルです」

「知っとる、知っとる、あそこなら。こりゃ……敗着を打ってしもうたかな」

佐村のほうは和尚ほど器用な脳味噌を持っていないから、碁盤のほうは碁盤のほうで別個に考えて石を置き、それからもとの話題に返った。

「ホテルの裏手に職員用の出入口があって職員はそこからエレベーターに乗って各階へ行くわけなんです。その入り口を通り抜けたところの草むらに古い貯水槽がありましたね。だれが放したのか金魚がいて、緑色の苔が浮いている……」

「深いのですかね」

「二メートルくらい。石の重しをつけて沈んでました」

「死因は？」

「絞殺……」

「殺しておいて、死体を水槽の中に放り込んだというわけですか」

「そうです」

「死体を見つけたのは……」

「ホテルのボーイです。めったに人の行かないところなんですがね。三月三日の朝は表面に氷が

張っていた。ボーイはなにげなく竹ざおで氷を突ついたら、水槽の底に妙なものがあるのに気がついて……」

「氷はその日の朝張ったのかな」

「いや。三日の朝はそう寒くなかった。寒かったのは二日の朝。結氷のぐあいからみて、氷の張ったのは二日の朝ですね。日陰だからそれが溶けずにいた」

「女が死んだのは？」

「たぶん一日の午後。正午少し前に家を出ている」

「それじゃあ、もう犯人の範囲もそう広くはないでしょうが……。犯行時間も、死体を水槽に隠した時間も限定されている。やれ、やれ、あんたが妙な話を持ち出すものだから、これはひどい碁になってしまった」

「投了ですか」

「はい。碁のほうはね。じゃが、そのお話、おもしろそうですね。聞こうじゃありませんか」

佐村が和尚の奇妙な才能に気がついたのは知り合って間もない頃だった。たまたま佐村が担当した事件にクラブのママ殺しがあつて、被害者の男出入りが多いため捜査が難航したことがあつた。そのことを碁勝負のあいまにちょっと漏らすと、和尚は聞くともなく聞いていて、数日後訪ねたときには新聞の切り抜きを出し、二、三のポイントを佐村に尋ねただけでみごとな推理をや

ってみせた。佐村はいささかプライドを傷つけられたが和尚の推理には充分な説得力があるのでその線に沿って捜査してみると、和尚の見込み通りに犯人があがった。

その後同じようなケースが一、二度あって、今では佐村も完全にシャッポを脱ぎ、難事件のたびに妙法寺を訪ね、碁を打ちながら和尚の意見を聞く習慣になっていた。

今度の事件も発生の当初はさして困難な事件とは思われなかった。

殺されたのはN大学の四年生、江藤純子である。死体の発見場所は和尚に話した通りエメラルド・ホテルの職員用出入口から裏にまわった古い貯水槽の中。発見されたのは三月三日の朝十一時近く。

江藤純子は、N大学の学生たちでメンバーを作っている楽団「ビッグ&キューティ」のクラリネット奏者である。楽団の名の由来はメンバーの男性はみんなずう体がデカく、女性は小さいから……。『ビッグ&キューティ』はアマチュア楽団にはちがいないが、マネージャーの田村が敏腕なのと、楽団員のそれぞれが玄人に近い技量を持っているので、結構先輩筋が関係しているクラブやホテルからの出演依頼が多かった。

エメラルド・ホテルでも三月の一日から——つまり江藤純子が殺されたと推定される日の夜から、七階ラウンジに出演することになっていた。

「その演奏は予定通りやりましたかね」

和尚は厚手の盃に口を寄せ、体をすこしなめに倒しながら飲み干した。

「ええ、十日まで。クラリネットが一本足りないけれど契約は契約ですから、とにかく予定通り

すませたそうですよ」

「まず順序として、その死んだ娘のことから聞かなければいけないねえ」

「ええ。なんて言うのかな。家は特別豊かでもないし貧乏でもない。普通の中産階級。母親が継母です」

「なるほど。家では邪慳じゃけんに扱われていた？」

「特別ひどいことはなかったけれど、母親のちがう弟と妹がいるんですね。当人にとってはそれほど居心地のいい家だったかどうか……」

「友だちやボーイフレンドは？」

銚子がカラになっているのに気がつく、和尚はポンポンと手をたたきながら言う。

和尚の手はよく響いて階下でもその音が聞こえるらしい。修行僧がかわりの酒を持って行儀正しく障子をあげた。

寺の周囲は町中のわりに静かである。

「世外勝境」というのもあながち誇張ではないのかもしれない。

「楽団の仲間とのつきあいがほとんどのようでしたね。『ビッグ&キューティ』には男のメンバーが何人かいるわけです。その二、三の連中とはかなり深いところまでいってましたね」

「深いと言うと肉体関係ですかね」

「もちろんですよ。このごろの女子大生はすぐにそこまですってしまいますからね」

「同じ楽団のあの男とも、この男ともくっついたわけですか」

「まあ、そうです。いろんな男とコッソリつきあうのがうまいんですよ。秘密主義者でね」

「色好み、かな？」

「ええ、多分。もともとこの女、そういうことが好きなタチなんでしょうな。それとも継母なので、どこかさびしがり屋だったのかな。楽団員のうち少なくとも三人とは関係があったらしい」

「ほう。その三人は？」

「ピアノの池田、ギターの山内、同じクラリネットの大井田……。もう切れてたらしいけど」

「その三人がまずあやしいわけ？」

「しかし、池田と山内にはガッチリしたアリバイがあるし、大井田もきめ手がない。それで今ではホテル内部の者か流しの犯行じゃないかって……」

「それはチトあきらめが早いな。その女のコ、なんていう名でしたかな？」

「江藤純子です」

「そう、そう。純子さんが殺されたのは、一日の何時頃かな」

「解剖の結果では、午後一時から三時の間……」

「フム。で、その夜、演奏のためにみんなが集まる時間は？ そんなに早くホテルに来る必要があったんですかな江藤さんは？」

「ええ、そこが問題なんです。マネージャーの証言ではホテル集合時間は午後七時半まで。事実みんなその日はそのくらの時刻に集まっているんですね」

「なぜ彼女はそんなに早い時間にホテルへ行ったか？ ホテルというより貯水槽のそばかも知ら

んけど……。それはわからんわけじゃのう」

「ええ……。少なくともだれかと会う約束があったという聞き込みはないんですよ」

「彼女はなんと言って家を出ているんですか？」

「なんにも言わずに……。ただ夕飯はいらないって」

「ほほう。楽団員のアリバイはみんなはつきりしているらしいですなあ、あなたの浮かぬ顔つきからすると」

「その通りなんですよ。まず麻雀グループ」

「麻雀グループ？」

「学生は気楽でいいですな。もう卒業式を待つだけですから、楽団のメンバーのうち池田、山内、谷木、野村、この四人はコントラバスの八城の家に集まって徹夜麻雀をやっているんです。二十八日の夜から……。八城は叔父さんの家に下宿しているんですが、叔父叔母が旅行へ行って留守なので、その間を利用して学生たちが集まったんですね」

「池田、山内、谷木、野村、それに八城ね……。麻雀は四人でするものでしょう？」

「だれかが順番に抜けて、その人は眠ったり、てんや物を取ったり、そばで雑用係をするんですね、こんな場合は」

「で、途中で家を抜け出した者はだれもいなかった。そういうわけですね」

「そうです」

「その家は……。どこ？」